



アオウミガメの還暦祝い

(姫路市広報課提供)

〈目 次〉

企画展「ひめすい Art exhibition -生きものたちの息吹にふれる-」

を開催しました

竹田正義……… 2

半世紀ぶりに見つかった残念なタコ!! テギレダコ

増田 修……… 4

アオウミガメのオスが 60 歳になりました

杉原直樹……… 6

2024年ひめすいで開催されたイベント紹介(秋～冬)

太田雄大……… 7

館長のツブヤ記

籠 善之……… 8

館誌抄 令和 6 年(2024年)12 月～令和 7 年(2025年)3 月

……… 8

企画展「ひめすい Art exhibition -生きものたちの息吹にふれる-」を開催しました

企画展のねらい

令和7年1月25日から3月23日にかけて、企画展「ひめすい Art exhibition -生きものたちの息吹にふれる-」を開催しました。



芸術作品が並んだ会場のようす

今回の企画展では、私たちに身近な生きものを題材に制作活動をされている、木彫り彫刻家のはしもとみおさんと和金絵師の岩田明久さんの作品を展示しました。展示した作品は、金魚やカメといった淡水の生きものや、ウミガメやウミウシといった海水の生きものたち、そしてはしもとさんの代表的な作品である犬や猫たちです。どの作品も生命感にあふれ、豊かな表情を感じることができました。

この企画を考案したきっかけは、はしもとみおさんの展示会で作品にふれたことでした。はしもとさんの作品の中には直接ふれることのできる作品があり、その作品から感じる生命感にとても感動したのです。私たち飼育係も展示を通してお客様に自然や生きものの大切さを伝えています。この点で作品から共通したメッセージを感じたのです。そこで、作品のもつ息吹にふれていただけるような感動を体験していただきたいと思ったのでした。

和金絵師 岩田明久さんの作品展示

岩田明久さんは、Artist GANとして活動されています。金魚を石に描いた作品はとても美しく優雅で、今にも空間を飛び出して泳ぎ出しそうでした。近年では透明なレジンと金魚を組み合わせた作品も制作されていて、

豊かな金魚たちの表情を感じることができました。会場は、描かれた金魚の赤色で神秘的な雰囲気が広がっていました。



レジンを使った岩田明久さんの作品

岩田明久さんのギャラリートーク

2月16日には、岩田明久さんのギャラリートークを行いました。作品を手がけるようになったきっかけや、試行錯誤しながら制作に取り組まれていることをお聞きし、作品のもつ奥深さを感じました。当日は各地から多くの方々が参加され、熱く語られる岩田さんのお話に聞き入っておられました。



制作活動について語る岩田明久さん

木彫り彫刻家 はしもとみおさんの作品展示

会場の後半では、はしもとみおさんの作品を展示しました。はしもとさんは、動物園や水族館を訪れて生きものを観察スケッチするなど生きものたちの造詣にも深く、これまでにジュゴンやラッコ、ウミガメなどの作品も制作されています。はしもとさんが長年飼われていたアカミミガメの「ウララ」をモデル

にした作品は、今にも甲らから手足が出てきて動き出しそうでした。微妙な手足の引っ込み具合や尾のしまい具合などは、私たち飼育係が見ても本当によく観察されていることが分かりました。はしもとさんの作品には、生きものへの温かな眼差しと、その中から表現される「生命感」があるように思います。



今にも動き出しそうな巨大なアカミミガメの作品「ウララ」



ジュゴンとマナティーの作品

はしもとみおさんのアトリエ訪問

はしもとさんの作品をお借りするあたり、私たちはアトリエを訪問しました。アトリエでは、はしもとさんがまさに作品を制作されている最中でした。アトリエにはその木を彫る音がやさしく響き渡っていました。木のいい香りが漂い、たくさんの作品に囲まれた素敵な空間はとても素敵で感動しました。



素敵な空間が広がるアトリエ

はしもとみおさんのギャラリートーク

3月2日には、はしもとみおさんのギャラリートークを行いました。このイベントは当初は予定していなかったのですが、はしもとさんのご厚意もあり実現しました。当館のSNSでの告知は開催日程間近でしたが、それでも当日は会場に入りきらないくらいの多くの方々で長蛇の列ができました。はしもとさんの作品が皆さんに愛されていることを改めて感じました。ギャラリートークは2部入れ替え制にして約60名の方々に参加していただきました。トークは、はしもとさんと私が作品の前で対話をしながら、作品にまつわるエピソードを順番にお話していただくという形式で進みました。はしもとさんのお話を伺いながら、制作活動に対するはしもとさんの気持ちや幅広い観察眼をお持ちであることを知ることができました。楽しい時間を皆さんと共有することができ、とてもうれしく思いました。



はしもとみおさんのお話はとても楽しかったです

企画展を終えて

今回の企画展は、いつもの企画展とは趣向が違っていて、作品をどう並べるのがいいのか迷い悩んだことも正直ありました。でも水族館の展示も作品の展示も、自然や生きものへの思いは共通していると思います。そのことを意識しながら作品に向き合い展示させていただいたつもりです。作品をご覧になった皆さんに、身近な生きものや自然に思いをはせていただけたなら、うれしく思います。これからも、水族館の枠にとらわれない、「水族館らしくない企画展」を考案していきたいと思います。

(竹田正義)



2021年12月7日に姫路市の坊勢漁業協同組合の竹中太作氏（現組合長）が、香川県小豆島東方沖（播磨灘北西部海域）で混獲した色々な水生生物を当館に提供され、その中に腕が細長い小型の見慣れないタコが混在していました。種名の確定に自信がなかったことから東京海洋大学の土屋光太郎博士に同定を依頼した結果、テギレダコ *Octopus mutilans* Taki, 1942であることが判明しました。

本種は、1942年に広島県因島周辺海域（豊後灘）産を元に記載され、1959年に岡山県西部から広島県東部にかけての水島灘で、わずかに記録された程度であり、研究者の間でも存在がほとんど知られていない知名度がとても低いタコです。したがって、今回の記録は正に半世紀ぶりということになります。

標本資料

- 2021年12月7日 香川県小豆島金ヶ崎東方海域、水深32～35m、マンガ底曳き網漁、竹中太作氏採集、6個体、HCA-MO-1062（姫路市立水族館軟体動物標本、以下同じ）
- 2021年12月11日 同上、4個体、HCA-MO-1069
- 2022年2月14日 兵庫県姫路市白浜町沖、水深18m前後、マンガ底曳き網漁、竹中太作氏採集、4個体、HCA-MO-1080
- 2022年12月5日 兵庫県姫路市白浜町沖、水深15m前後、マンガ底曳き網漁、上田義秀氏採集、3個体、HCA-MO-1084（A・B）

形態など

タコの頭と呼ばれる外套長は40mm程度、全長は190～230mmほどの手の平に収まり、日本産のタコの仲間では、ずいぶんと小さくて細身な種類です。第3ないし4腕は外套長の約5.7～6倍あり、播磨灘でも漁獲される食用のテナガダコの4.5～5倍よりも腕の長さの比率がとても長いタコです。腕の長さの順番を示す腕式は3>4（または4>3>）2>1であり、テナガダコの腕式1>2>3>4と長さの配

列順が逆転しています（図1・2）。体はとても柔らかく、腕は柔軟に伸縮します。体色は淡い灰黄色の地に微細な濃淡模様が見られ、体の濃淡を変化させることは可能ですが、マダコやテナガダコのように赤色系の濃い色合いには変色しないようです。

1942年の本種が記載された文章によれば、広島県因島周辺ではヒモキレダコ（腕が切れやすいタコ）、クサレダコ（体が病的に柔らかいタコ）と呼ばれており、腕を自ら切ってしまうことからテギレダコと名付けられたようです。今回得られた17個体のうち、全腕が揃っていたのは1個体のみであり、中には1～2本の腕しか残っていない個体もあり、本種の腕の切れやすさは記載文の通りでした。腕が切れた原因は、底曳網の中でモミクチャになったことでしょうが、容

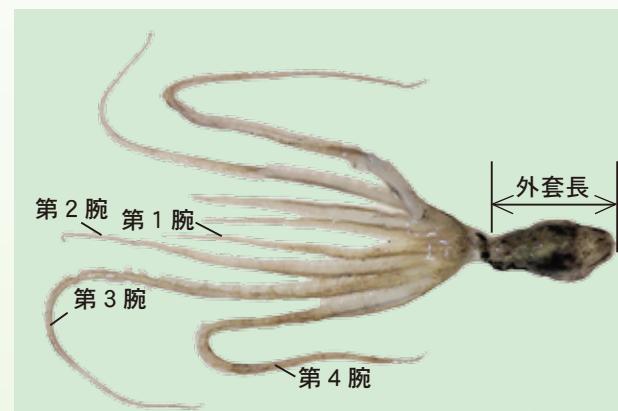


図1. テギレダコ (HCA-MO-1084B)



図2. テナガダコ

器に移し替えるだけでも自ら腕を切り離すこともあります、自然界では敵に襲われた時に腕を自ら切り離し（自切という）、敵の目がそちらに集中している間に逃げるのではないかでしょうか。

なお、今回得たタコは全て同じような大きさであり、右第2腕の先端が成熟したオスの証である生殖腕と思われる個体（図3）もあったことから、成熟サイズに達しているとみなされました。



図3. オスの生殖腕（右第2腕）

細長い腕は滑らかに動き、吸盤の吸着力は弱く、入れ物の壁面に付着していても簡単にはがすことができます。触っても泳ぎ跳ねるような機敏な動きは見られず、長い腕を使って容器の底面や側面を滑るように動きます。柔軟な軟体のためテナガダコのように海底の底床に潜り込んで生活していることは間違いないと思いますが、飼育下においては、細砂で観察したため、潜り込む様子は観察できませんでした。

なぜ、これまで獲れなかった？ 注目されなかったのか？

最初の6個体以降、追加標本を目的として採集を依頼したところ、3ロット11個体を追加できました。しかし、本種を獲る唯一の手段である底曳き網漁が盛んな播磨灘において、これまで全く目に触れなった理由としては・・・、

- ・体が小さくて柔らかく、網の目を抜けやすい。
- ・網にかかっても腕が切れた個体が多く、得体の知れない小さな肉の塊にしか見えない。
- ・小さくて、死ぬと汚れたような白色で、美味くなさうなので、漁獲対象としない。
- ・時期や使用する海域が限られた“マンガ”と呼ばれるカギ爪のついた網（図4）で海底を引く漁法でしか獲れていない。

などがあげられます。



図4. 底曳き網の口につけるマンガと呼ばれる金具

姫路市が面する播磨灘では、食用のタコとしてマダコがよく知られ、水揚げ量は多くないのですが、同じく食用のテナガダコやイイダコも漁獲されています。一方、テギレダコは、小さいうえに数が少なく、見た目が悪くて美味しそうに見えない（図5）ことから、漁業者には見向きもされないタコです。また、報告の極端な少なさは、タコやイカ類を研究する学者らにも興味を持たれていなかった表れではないでしょうか。



図5. 決して美味しそうに見えない

いずれにしろ半世紀ぶりの確認となった希少なタコですが、水産面でも研究面でもぱっとしない“残念なタコ”と思うのは私だけでしょうか。

謝 辞

貴重なテギレダコの生体資料や情報を提供された姫路市坊勢漁業協同組合組合長の竹中太作氏、同市家島漁業協同組合の上田義秀氏に厚くお礼申し上げます。 (増田 修)

アオウミガメのオスが60歳になりました

令和6（2024）年9月16日の「敬老の日」に合わせて、60歳（推定）を迎えたアオウミガメの還暦祝いイベントを行いました。3頭のアオウミガメうち、今回60歳となったのはオスの個体です。名前はついていませんが、成体のオスはこの一頭だけなので、飼育員は「アオウミガメのオス」や「アオのオス」と呼んでいます。



還暦を迎えたアオウミガメのオス

●やってきたのは1966年

この個体が当館にやってきたのは、開館年の1966年までさかのぼります。開館記念として、日和佐（徳島県）から搬入された2歳ほどの子ガメが、当時の姫路市長の手で水槽に放たされました。その時の子ガメがまさにこの個体です。以来58年もの間、当館で飼育展示されています。

*当時推定2歳でしたので、58年を足して現在推定60歳とされています。



開館式で水槽に放たれる子ガメ

●58年って長いの？

ところで、亀の寿命は万年とも言いますが、58年はウミガメにとって長い年月なのでしょうか。実はウミガメの寿命は、長寿ゆえにはっきりとはわかっていません。ですが、58

年は、少なくとも当館のウミガメ類の中では最長の飼育年数です（下表）。また、日本動物園水族館協会加盟の水族館の中で、2024年末現在で最も長い間飼育されている記録です。これらのことから、飼育下では長生きであると言えるでしょう。

種類	性別	飼育年数
アオウミガメ	オス	58年
アオウミガメ	メス	34年
タイマイ	メス	49年

当館で長期飼育中のウミガメトップ3（2024年末時点）

●還暦らしいイベントに

今回のイベントでは、60歳のオスを含む2頭に花束を贈呈しました。花束といっても、アオウミガメは草食性なので、花束を模した野菜の束です。普段は魚肉以外にキャベツを与えていましたが、今回は還暦祝いということで、カリフラワーなど4種類の野菜を贅沢に使って、紅白をイメージしたアレンジにしてみました。また、還暦といえば「ちゃんちゃんこ」が定番です。本来ならウミガメたちに着てもらいたいところでしたが、さすがにそういうわけにもいかないので、代わりに当館のボランティアに衣装を着ていただきました。



野菜の花束（左上）と、花束贈呈の場面

当日は多くのお客様に見守られ、盛況のうちにイベントを終えることができました。ウミガメに限らず、当館で開館当初から飼育している生きものはこの個体だけです。これからも末永く当館を見守ってもらうべく、私たちも健康管理に努めたいと思います。 （杉原直樹）

2024年

ひめすいで開催されたイベント紹介 (秋~冬)

ひめすいナイト

2024年11月16日に今年で3回目となる「ひめすいナイト」を開催し、抽選で選ばれた72名の方に夜の水族館を探検してもらいました。今回の「山のうえの魚たち」ではひめすいナイトの人気イベントであるウミホタル発光実験の裏側について少しお話ししようと思います。

ウミホタル発光実験とは、飼育員がウミホタルについての解説を行い、ウミホタルが光る瞬間を見てもらうイベントです。この実験で使用するウミホタルは実際に飼育員が海に行き採集してきます。



ウミホタルを採集した海

ウミホタルは夜行性で砂地にいることが多く、昼間は砂の中に潜っており夜になると餌を食べるため砂の中から出てきます。そのため砂から出てくる夜を狙って採集に行きます。採集方法はとてもシンプルで、餌となるイカを入れた仕掛けを砂浜から投げ入れ、20分ほど待ってから引き上げるだけです。多い時には1つの仕掛けに100匹以上入ることもあります。採集したウミホタルは慎重に水族館まで運び、イベント当日まで飼育します。

近年は姫路市内でのウミホタル採集が難しく、採集のため遠方まで赴くこともあります。それでも参加者の方がウミホタルの発光する姿に感動している光景を見ると、頑張ってよかつたなと思います。



バケツの中で光るウミホタル

干支の引継ぎ式

同年12月26日には水族館内で干支の引継ぎ式も行いました。辰年にちなんでタツノオトシゴの仲間のホットベリーシーホースと、巳年にちなんでヘビの仲間のアオダイショウを間近で見てもらいながら、生き物についての解説と今年の振り返りを行いました。



干支の引継ぎ式の様子

また、姫路市内で見つかった全長185cmものアオダイショウの脱皮殻も展示し、その大きさに皆さん大変驚かれていました。



巨大なアオダイショウの脱皮殻

(太田雄大)

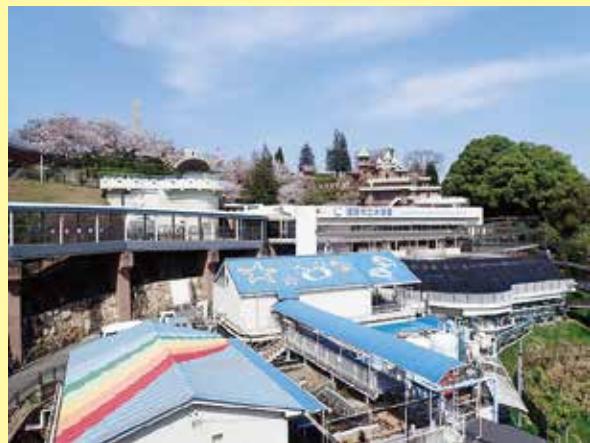
館長のツブヤ記

令和6(2024)年度の当館の年間入館者数は26万人になると見込んでいます。この26万人は、平成23(2011)年のリニューアルオープンに次ぐ過去2番目の多さです。また、コロナ禍前には20万人前後で推移していましたので、それと比較しても大幅に増加しています。本当に有難いことです。その要因を考えてみると、人気の企画展を開催したり、小さなことですが新たな取り組みをちょこちょこ実施したりといったことの積み重ねではないかと思います。ただ、入館者の増加は2023年の11月から、ほぼ毎月前年同月対比で増加が続いている。このことを踏まえると、当館の取り組みだけでは説明ができない気がします。そこで、その他の外的要因がないのかですが、当館がリニューアルオープンした平成23年当時には県内の主な水族館は当館のような公立2館、私立1館でした。ところが現在は公立1館、私立4館となっています。当

当館の入館状況

館と他の私立（民営）では入館料が大きく違い、2倍から6倍以上の差があります。展示内容も各館で異なっていますし、安かろう悪かろうではダメなのは言うまでもありませんが、料金を抑えて学びの場を提供していることにニーズがあるのではないかでしょうか。SDGsの目標にもあるように、より多くの方に教育（学び）の場を提供する意義を強く感じています。もちろん、この料金設定は市民の皆様のご負担のたまものです。感謝、感謝です。

(籬 善之)



館 誌 抄

令和6年

12/13～15 第35回日本ウシガメ会議（宮崎）出席
12/26 干支の引継ぎ式（タツノオトシゴからアオダ
イショウ）
12/27 干支にちなんで市内で見つかった大型の蛇
(アオダイショウ) の抜け殻展示

令和7年

1/2～2/3 干支（シマウミヘビ）の展示開始
1/20～21 第69回水族館技術者研究会（京都）出席
1/25～3/23 企画展「ひめすい Art exhibition
－生きものたちの息吹 にふれる－」
2/4 ヤゴ採集（市内）
2/5 家島の魚PR展示（家島小学校）
2/6 クラゲ採集（市内）
2/15～19 三重大学生物資源学部 学芸員実習
2/16 企画展ギャラリートーク（岩田明久氏）
2/16 紙粘土工作教室

令和6(2024)年12月～令和7(2025)年3月

2/16 R7年度ひめすいボランティア説明会
2/16・3/16 大人限定クイズラリー（ひめすい
ボランティア）
2/22～23 第24回日本カメ会議（豊田市）出席・口
頭発表
3/2 企画展ギャラリートーク（はしもと みお氏）
3/6～7 第32回日本飼育技術学会（東京）出席
3/9 缶バッジ工作教室
3/9・16 水族館の裏側探検（サポートーー対象）
3/15～16 第11回淡水ガメ情報交換会（神戸市）
出席・口頭発表

姫路市立水族館だより =山のうえの魚たち=

通巻第83号 令和7年(2025年)3月31日発行
編集 発行 姫路市立水族館 篠 善之
〒670-0971 姫路市西延末440(手柄山中央公園)
Tel. 079 (297) 0321 Fax. 079 (297) 3970
E-mail:aqua@city.himeji.lg.jp
URL:https://www.city.himeji.lg.jp/aqua/